

アムールの風

正統右翼の論理

第2回

田中健之
(黒龍會会長)

第一章

すべては国民を守るために

明治政府に抗った人々①

めざすは明治維新の刷新

戦後保守政治の政治的指南番

今日、学校の授業では、自由民権運動が日本の民主主義のスタートのような教え方をしています。

自由民権運動と言えば、板垣退助が率いる土佐の立志社がよく知られていますが、その双壁を成していたのが、平岡浩太郎をはじめ箱田六輔、頭山満らを中心

に活動していた、福岡の玄洋社です。

自由民権運動を経て、平岡浩太郎は、炭鉱事業で得た巨額な資金をふんだんに投じて、薩長藩閥政府に対抗するために、板垣退助が結成した自由党と大隈重信が設立した進歩党を合同させて、憲政党を結党し、隈板内閣を組織しました。それは日本最初の政党内閣として、第三次伊藤博文内閣を倒したのです。

憲政党の結成によって、自由民権運動を目的として土佐の立志社に代表される全国の地方政社は、政党に組み込まれていきます。

その後間もなく憲政党は、旧自由党系の憲政党と旧

進歩党系の憲政本党とに分裂し、憲政党は立憲政友会に合流し、憲政本党は後の立憲民政党へとなります。

自由民権運動を活発に行っていた、全国の地方政社が次々と政党に組み込まれて行く中、唯一、福岡を拠点に活動していた地方政社の玄洋社だけは、そうした政党には与しませんでした。

平岡浩太郎は、自らの努力で成立に漕ぎ着けた、日本最初の政党内閣である隈板内閣を組閣するに当たり、その激しい猟官運動、つまり大臣の椅子取りゲームをする議員たちの様子を醜いと思っ、心の底から嫌い、自らは一切の閣僚ポストを拒否しました。

しかし、一つの方法として、政党政治による以外に藩閥政府を倒す良策は見つからない、そんな時代にあつて、将来の政党政治の腐敗というものを平岡はこの時すでに見越して、予測していたのです。

玄洋社の産みの親と言われている、人參畑塾（興志塾）の高場乱先生が、「国会、国会何にこっかいとならんごとせないかん」と、博多弁で言っていました。「国会、

国会と何を言ってるのか、ということになってはいけないよ」という意味です。「こく」とは博多弁で「言う」という意味です。

今では、右翼の源流だと巷で言われている玄洋社の設立の原点は、自由民権運動のスタートと共に始まっていたのです。世界でも民族運動が、近代的な民権思想と融合したという事実は、あまり例がないと思います。つまりそれは、玄洋社が偏固で偏狭な民族主義運動ではなかった、ということの意味しているのです。

平岡浩太郎は、地元の北九州の開発にも重点を置き、地元の福岡に殖産興業の誘致もしています。その経済活動は、日本の近代化に直結しています。その理由は、日本を近代化していかなければ、近代的な兵器によって武装した欧米の侵略に抵抗できなかったからです。

「尊皇」「愛国」「民権」という精神を子孫の子孫に伝えて、断じてそれを変えてはならない、と誓いを立てた玄洋社の憲則を基に平岡は、近代化を推進して行くのです。

近代化の事業を行うに際して、平岡は決して金銭に屈して、金儲けに奔走して己の魂まで売ることを断じて良しとしませんでした。あくまでも地元福岡の人々の雇用を土台として考え、玄洋社の憲則に謳われた「人民の権利を固守」（民権）を実行するための経済活動を志していたのです。

古島一雄という人物がいます。この人は吉田茂の政治指南番と言われた人です。そのためか、橋本龍太郎元首相が首相時代に、その官邸に古島の額が掛けてありました。

保守政治の政治的指南番とも言われた古島一雄は、地元福岡の日刊紙『九州日報』の主筆でした。

『九州日報』は玄洋社の機関紙的な新聞で、平岡浩太郎の資本によって、九州最大の部数を誇る日刊紙として発行されており、平岡自身が古島を引っ張ってきて、『九州日報』の主筆にさせました。彼は玄洋社の社員ではありませんでしたが、玄洋社の人々から薫陶を受けて、彼らと近い周知人物的な存在でした。

その古島が、戦後の保守政治の政治的な指南番と言われていた人物だったのです。

戦後政治の流れの中に在って古島は、玄洋社の精神を伝えようと努めてきたのです。

——独自の論説で読者を獲得——

『九州日報』は、現在の『西日本新聞』です。

もともと福岡には、『福陵新報』という頭山満が創刊した玄洋社系の新聞社がありました。それは、玄洋社の機関紙的な役割を果す新聞でした。それに対抗するようにして発刊されたのが、自由党系の『福岡日日新聞』という新聞でした。

『福陵新報』は、間もなく経済的に行き詰まり、それに対して、平岡浩太郎が資本を提供して廃刊の危機を救いました。『福陵新報』は、『九州日報』と改題して、大東亜戦争中まで発行し続けていました。

当時の新聞は、お互いが、それぞれの異なった主張

をすることによって、それらの主張を支持する人々が、それぞれ支持する論陣を張る新聞を購入して、その販売部数の競争をしたものです。つまり玄洋社を支持する人々は『九州日報』を、それとは逆に、自由党的な主張を好む人々は『福岡日日新聞』を購入したのです。

今日の新聞はどんな新聞を読んでも、だいたい同じような論調で、しかもヤクザ者みたいな新聞勧誘員が玄関先にやって来て、その家人が恐怖心から止むを得ずに、新聞を購読せざるを得ないような状況に追い込まれた結果、別に読みたくもない新聞社が発行する新聞をとる人も少なくなっています。しかし昔は、どの論調を自分が好むか、あるいは支持するのにかよって新聞が読まれたのです。

それが、戦時下の大政翼賛体制の下、昭和十七（一九四二年）八月十日、戦争遂行の言論統制のために新聞はブロック化され、一つの県に一つの県紙しか置いてはならないとする、「一県一紙」という政府の方針によって、『九州日報』は『福岡日日新聞』と合同、『西日

という人がいます。彼は、当時、政財界の黒幕と言われていた、玄洋社の杉山茂丸の長男で、後に『下グラ・マガラ』の作家として今でも人気が高い、幻想小説家としても著名な、夢野久作です。他にも『九州日報』には、孫文と中華革命の支援者で、『三十三年の夢』の著者として有名な宮崎滔天や、政治家として著名な中野正剛、思想家として評価が高い清水芳太郎、そして前述した古島一雄などがいました。

このように平岡浩太郎は、天下国家のために政治活動をしたり、いろいろな志があったりする浪人たちが、生活の心配がないようにと、『九州日報』の特派員や記者として雇って、生活の保障をした上で、自由に記事を書かせ、天下国家のための活動を思う存分させていたのです。平岡は、「正業を持って天下国家に当れ」と、常に後輩や門下生に対して諭し、彼らが自由に活動しながら、働ける職場を提供し続け、人材を育成しました。平岡は、辛亥革命を支援するために、『九州日報』の記者を特派員として大陸に派遣して、活動報告もさせ

本新聞となりました。翌年四月十七日、九州日報社と福岡日日新聞合資会社が合併、福岡日日側が存続法人となって『株式会社西日本新聞社』が発足しました。これによって、『九州日報』の名称が消え、実に五十五年間、玄洋社の機関紙的な新聞として、半世紀以上にわたって日刊紙を発行し続けていた『九州日報』の幕はここに閉じました。

平岡浩太郎が、『九州日報』の主筆兼社長として招いた人に、福本日南という玄洋社の論客がいました。

彼は赤穂浪士の顕彰で知られている人物で、『元禄快拳録』を同紙で連載、後にこれを単行本として上梓しました。同書は、赤穂浪士の事蹟を詳述した名著であり、今日では岩波文庫になっています。赤穂浪士の映画やドラマ、演劇などの原作のほとんどが、『元禄快拳録』に依っています。

このように平岡は、『九州日報』に一流の言論人を集めました。

『九州日報』の記者として活躍した一人に、杉山泰道（やすみち）がいます。言論人としても一流の人が、玄洋社にはいたことを物語っています。現在の右翼や保守と言われている団体の中で、日刊紙まで持って活動する組織は、なかなかありません。『九州日報』の流れは、今でも『西日本新聞』として続いています。

平岡浩太郎は、炭鉱事業の成功で得た豊富な資金を、こうした言論活動にもふんだんに使っています。自分たちのイデオロギーを明確に、玄洋社の主義主張を『九州日報』で論陣を張っていたのです。

だから玄洋社には、国民の支持がありました。玄洋社には、政治的な力もありましたし、自分たちで築いた経済的な基盤もありました。

このように玄洋社は、政府や財閥、軍閥などから資金を貰っていませんから、独立した行動ができました。自分たちが訴えたい精神を貫き通すことができたのです。やはりそれは極めて大事なことです。

私自身の場合も、提灯記事を求めるスポンサーや紐

付きの資金提供者もいませんから、言いたいことを言えます。やりたいことは、経済的な足枷のために十分には出来ませんが、私自身の行動は誰からも指図もされなければ、規制をすることもできません。言いたいことは、堂々と言えます。

いま、左派の人々は「人権、人権」とか言います。右派の保守と言われる人たちは「愛国、愛国」と言う主張だけをやっていきます。両方とも共通点は、経済はメチャメチャ弱いことです。

財閥に勝るとも劣らない、玄洋社の存在とは比較するに及びません。

——すりかえられた明治維新——

ところで、江戸時代は徳川幕府が、天皇と国民との間に藩屏として立ちほだかり、天皇と国民が分断されていた。

本来、明治維新は、幕府を倒すことによって、分断

されてしまった天皇と国民を一体化して、国の建て替えて直しをするための復古革命でした。

それが、薩長藩閥政府による、単なる幕府との首のすげ替え、つまり薩長藩閥政府の独裁に変わってしまっていました。薩長藩閥政府が新たな幕府となって、天皇と国民との間に立ち塞がる藩屏となってしまったのです。だからこそ、天皇と国民とが一体となる一君万民という、日本本来の国の姿を取り戻すべく、もう一度、国の建て替え、建て直しをする第二維新が必要だったのです。

特に外交問題において、幕府が、欧米列強諸国と締結した不平等条約の改正こそ、明治維新後の日本が抱える大きな課題でした。その課題を引き継いだのが、薩長藩閥政府でした。

ところで、幕末において長州藩や薩摩藩は、英国をはじめとする欧米列強諸国と戦争をして、負けた経験があります。そのため彼らは、欧米列強諸国の怖さを知っていました。

そうした新政府に対して、民族としての抵抗が生まれます。その代表的な存在が、玄洋社だったのです。

急速に欧米化していくことは、本来の近代化ではないと彼らは主張したのです。もちろん、欧米の技術というものは、学ばなければなりません。しかし、薩長の独裁に任せていたら、欧米崇拜の精神によって、本来の日本の精神も文化も伝統も無くなってしまふ。そういう危機感から日本を救うべく、祖国の建て替え建て直し、つまり第二維新の必要性を玄洋社に代表される人々は、痛感したわけです。明治維新は一流の人間が志半ばで死んでしまっており、新政府で権力の座に就いたのは、生き残った二流、三流の人物であったと言われています。当時の二流、三流だった政治家たちも、維新の激動を経験しているため、現在の政治家と比較した場合、そのレベルの高さには雲泥の差があります。

ところで今日、玄洋社を民権派を裏切り、国権派に転向した右翼だとして、批判する学者が多くいます。

その理由は、明治二十五（一八九二）年の松方内閣の

年二月十一日のことです。そんなことまで主張して、日本が欧米化することが近代化なのだ、と主張する欧化主義的な勢力が権力者として日本を統治し、動かし始めたのです。

時に海軍軍拡計画があつた時に玄洋社は、軍拡を支持していた事によります。それ以来、玄洋社は、民権派を裏切つて国権派に変わった、という言い方を学者はしています。

しかし玄洋社が、海軍軍拡計画を支持したのは、明治十九（一八八〇）年に清国の水兵が日本の長崎に上陸して、同地で乱暴を働いた事件がその理由でした。

当時は不平等条約がありましたから、いろいろな外国人が日本に来て、わがまま放題をして日本で暴れていたのです。

そうしたことの経験から、玄洋社の人々は、国防をしっかりとしなくては、日本に横暴を働く外国に対して、国家としての権利を守ることができない、という事はつきりと自覚しました。国家が外国によって危険に晒されたとしたならば、人民の権利は守れません。国土が外国から侵略されてしまったならば、人民の権利は、たちまち侵略者によって奪われて、植民地の奴隷になつてしまいます。世界の弱肉強食の中から国の権

利を守っていくということは、まさしく人民の権利を守る事と同意義なのです。

国家の権利というのは、外国の植民地にならずに祖国が自由に独立するという権利です。

今の北朝鮮について、ロシアのプーチン大統領は「小国が独立するために外国の圧力を跳ね退けるためにみずから核武装して当然じゃないか」と述べています。やはりきちんとした国防、すなわち充実した防衛力がないければ、国家としての独立が危ぶまれます。ましてや当時の日本は、欧米列強諸国との不平等条約の下です。その不平等条約を改正して、それらの国々と対等な関係でなければ、人民の権利を守る事は決して有り得る事は出来ないのです。（続きは次号にて）



田中 健之 たなか たけゆき

歴史作家、維新運動家、昭和38年11月5日生まれ、福岡市出身。玄洋社初代社長平岡浩太郎の重孫で、果敢会を創立した内田良平の血脈遺徳を継承する親族。拓殖大学日本文化研究所近現代研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所及びモスクワ市立教育大学外国語学部客員研究員。日露歴史協会の会長。2008年に黒龍省復興し学会に就任。主な著書に『靖国に祀られる人々』、『昭和維新』、『北朝鮮の終焉』、『実は日本人が大好きなロシア人』、『横浜中華街』など。中央公論「正論」、『歴史群像』などの論議誌に多数執筆。